

キャラクター名 アンバー・シュバイツァー	プレイヤー名
-------------------------	--------

種族	人間	種族特徴	剣の加護/運命変転		
生まれ	冒険者	性別	女	年齢	17
冒険者Lv	7	経歴	罪を犯したことがある		
経験点	940		師と呼べる人物がいる 純潔である		

技	12	能力値	A-F	成長	他修正	能力値	ボーナス	技能	Lv.	技能	Lv.
		器用度	12	4		28 + 2	5	フェンサー	5	アルケミスト	1
体	10	敏捷度	10	3		25	4	スカウト	3		
		筋力	12	5	6	33	5	レンジャー	1		
心	12	生命力	11	3		24	4	セージ	7		
		知力	12			24	4	エンハンサー	1		
		精神力	10		-3	19	3	バード	1		

戦闘特技		能力値	備考
鋭い目	2120p		p
弱点看破	2121p		p
必殺攻撃	1B38p		p
回避行動	1B29p		p
武器習熟A/スピア	1B31p		p
防具習熟A/非金属鎧	1B31p		p
			p
			p
			p
			p

言語	会話	読文
エルフ語	○	○
交易共通語	○	○
ドラゴン語	○	
汎用蛮族語	○	○
魔神語	○	
魔動機文明語	○	○
妖精語	○	
シャドウ語		○

練技/呪歌/騎芸/賦術		備考
キャッツアイ		
ノイズ		
クリティカルレイ		

技能	基本レベル	基本命中力	基本回避力	基本ダメージ
ファイター	0			
グラップラー	0			
フェンサー	5	10	9	10
シューター	0			

鎧と盾		必要ランク	筋力	回避力	防護点
鎧	ボーンベスト		16	0	6
盾	カイトシールド		13	1	1
その他補正(防具習熟/回避行動 etc)					1
回避技能	フェンサー	合計値	10	9	

武器	用法	必要筋力	命中修正	命中力	C値	追加ダメージ	威力	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
アールシェピース	1H両	15	-1	2d+ 9	9	11	25										
アールシェピース	2H	15		2d+ 10	9	11	30										
サーベル	1H	10		2d+ 10	9	10	10										
ダガー	1H	3		2d+ 10	9	10	3										
刹那の短剣	1H	1		2d+ 10	9	10	1										
牙	2H#			2d+ 10	8	10											
				2d+													
				2d+													

制限移動	通常移動	全力移動	回避	防護点	HP
3 _m	25 _m	75 _m	2d+ 10	9	45

魔物知識/弱点	先制力	生命抵抗	精神抵抗	MP
2d+ 11	2d+ 7	2d+ 11	2d+ 11	19

魔法技能	Lv.	魔力	魔法技能	Lv.	魔力

装備品	説明
頭	
耳	念話のピアス 一日に合計10分間、対になるピアスをしている人と念話できる。
顔	ひらめき眼鏡 見識、探索判定の固定値に+1。旦那はもしも眼鏡フェチかど購入。
首	奇跡の首飾り 生死判定のダイスを一度振りなおすことができる。一度使用すると壊れる。
背中	ウエポンホルダー 補助動作で武器や盾を背中に取り付けられる。一度に取り付けられる武器または盾は一つまで。
右手	信念のリング 「幸多かれ」の言葉とともに贈られたもの。精神抵抗値+1。
腰	多機能ブラックベルト 防護点+1。旦那がくれたのを弄った。
足	
その他	

装備品	説明
左手	宗匠の腕輪 緑色の腕輪。器用度+2。 +アルケミーキット 何これカッコいい！ と購入。

その他メモ	自動失敗チェック
生まれは結構な貧困層で、親に売られてしまうも隙について逃げ出したかなりのパワフルさん。この時人買いをめぐるところしており、彼女の人生初の犯罪経験となっている。もっとも、本人からすれば当たり前のことなのでなんとも思っていない。 その後、親のところに戻れるわけもなく一人ふらふらとゴミを漁っては生きるといふ日々を送っていたところを一人の女性に拾われる。その女性こそが彼女の人格形成の一端を担った張本人。拾った理由は自分の体を買おうとした男性に「いくらで？」と聞いて金を出させ、それを掠め取って逃げるといふ悪知恵を買って、とのことらしくこの女性の性格が見て取れる。	□□□□⑤ □□□□⑩ □□□□⑮ □□□□⑳ □□□□㉑ □□□□㉒ □□□□㉓ □□□□㉔ □□□□㉕
拾われてからは何をしているのか分からない女性のもとで勉学に励み、悪知恵で生き抜くだけの知力、知識、ついでに腕っ節も手に入れた。しかし本人は自分の才能など露知らず、生きたいように生き、生きたいようにするというスタンスでロクに武芸は磨いていない。それでも才能でそこそこななんとかなってしまってたが。 そんなこんなで、師であり育ての親である女性のもとで生きて早数年、その女性が「よし、お前もう一人で生きてけそうだし行け」と言いだし、それに「はい♪」と答えて了うと立ちを果した。元々師とした女性も同じように生きていたと聞かされていたので、まあこ	□□□□⑤

